

名簿を読み上げる機会があると、それぞれの名前に込められた願いや思いを想像してしまつて、ついつい読み上げるスピードが落ちてしまつことがある。名前を見ると男か女かがわかることが多いし、「〃夫」「〃子」のように、形式によっては位置も決まつている。これを「文法」といっていいかどうかはわからないが、命名にも一定の傾向はあるようだ。

名前のつけ方に関する議論は命名論と呼ばれる。赤ちゃんの名づけなどももちろん命名論のテーマになるが、会社名、製品名、映画の題名などは、経済的效果にかかわる。例えば、あのキーウィフルーツは、ニユージランドでも、最初は別の名前と呼ばれていたという。原産は中国なのでそれで「鬼桃」「縄梨」「藤梨」などと言つ名前もあつたらしい。ところが、実がニユージランドの鳥のキーウィに似ているところから、キーウィフ

ruitsと呼ばれるようになり、急に人気が出てきたという。確かにあのかわいらしい鳥のイメージのほつが、「鬼桃」といつた名前より好まれそうである。

作家の名前もおもしろい。こちらはペンネームである。例えば、正岡子規は、知られているように、喀血して子規という号にしている。「懶祭書屋主人」などという号よりも、なんとなく悲壮な気持ちが現れている。そういえば、日本最初のリアリズム小説を書いたとされる、本名長谷川辰之助さんは、そのペンネームを、「二葉亭四迷」という戯作者ばりのものになっている。不思議な気もするが、やはり出発期の影響もあるのだろう。一方、「自分」をストレートに肯定的に出すとされる白樺派の作家たちは、武者小路実篤さんのようにまるだしの本名である。このあたりは、文芸思潮がなんとなくペンネームにも反映しているようにも思える。

それにしても、夏目金之助（漱石）にしても、森林太郎（鷗外）にしても、考えてみると、音の数が多いというか、長い名前である。「き・ん・の・す・け」「り・ん・た・ろ・う」のように、五つの音である。現代でも「しんのすけ」のような名前がある（そんなキャラクターの漫画もありますな）。これらはみな男性の名前である。男性の名前を名簿や新聞などで見てみると、四音とか三音とかのものが多く、また、五音以上のものも割にある。逆に、たまたまかもしれないが、二音以下のものはあまり見かけないようだ（なくはない）。

では、女性の名前はどうかだろうか。女性の名前を声に出して読み上げて気づくのは、相対的に、短いということだ。女性とすぐわかるような名前前五音以上のものというのはいらないのではないだろうか。四音でもめずらしい。逆に、三音も多いが二音の名前も多い。時代が古くなるが、たとえば樋口一葉の本名は「なつ」である。「〃子」「さん」「夫」さんのように、性差の標識がついた名前もあるが、それ以外にも、言葉のイメージと結びついた「らしさ」のようなものがありそうだということである。要するに、世の名づけ親たちが、社会的な性としての、男性性、女性性を、名づけにある程度反映させようとする場合、音の数などもその要因としてかわつ

ていそうだということである。落語の寿限無ではあるまいから、別に名前の長さや価値観とは関係はない。しかし、名前の長さからくる「重々しさ」「軽さ」といつたイメージが「社会的男女差」の一種おしつけ的な通念になっている可能性はある。

ひらがなの名前が漢字の名前かという問題もある。ひらがなの名前は、男性の本名にはあまり見かけないが、女性の本名には時に見かけるように思う。言い換えれば、「ひらがなのイメージ」と「社会的に思い込まれている男性性」との相性はあまりよくなく、「社会的に思い込まれている女性性」との相性はよいということだろう。ではその「ひらがなのイメージ」とはいかなるものかも、よく考えてみたいところである。

男女平等の現在であっても、男らしさ、女らしさということが言われる。しかし、それと、ある個人がどういう本性なり個性をもっているかということとの間には必然性はない。また、「〃らしさ」という観念が悪用されることもないわけではない。そうであれば、名前をつけるときに、知らず知らずにイメージしてしまつ「〃らしさ」についても、考えてみる機会が必要だと思われる。「名前の文法」は、その意味で、あつて、ないものであり、もしかすると、なくていいもの、なかかもしれない。